

1. 開催概要

展覧会名	セザンヌーパリとプロヴァンス		
会 期	平成 24 年 3 月 28 日～6 月 11 日		
開催 施設名	国立新美術館	入 場 者 数	307,480 人（特別内覧会等含む）
<p>本展覧会は、「近代絵画の父」と称されるポール・セザンヌ(1839-1906)の画業を、これまでの国内外でのセザンヌ展では扱われたことのない初めてのテーマ設定、すなわちセザンヌの創作活動に決定的な役割を果たした「パリ」と「プロヴァンス（南仏）」というフランスの南北 2 つの場所の対比によって検証する試みとして企図した。</p> <p>セザンヌの初期から晩年にいたる制作を「風景」「身体」「静物」など全体で 6 つの章に分けて構成し、当初の計画どおり日本を含む 8 ヶ国・40 余の所蔵先から合計で 88 点の作品を借用することができた。内訳は、パリとその近郊で制作された作品が 38 点、南仏で制作された作品が 50 点となり、企図したとおりの南北の対比による効果的な展示が実現できた。</p> <p>会期序盤や連休中の週末に天候にめぐまれず、入場者数は当初計画の 33 万人に届かなかったが、美術の専門紙誌やテレビ番組など各種メディアで重要な展覧会として紹介されたほか、入場者の大多数から肯定的な評価を得た。</p>			

2. 補償制度の活用による国民的利益に関する取組結果

(1) 高校生の入場料無料日の拡充

中学生以下の入場無料とともに、高校生を対象に従来は会期中で 3 日間実施していた無料日を拡充し、①開幕初日の平成 24 年 3 月 28 日（水）から春休み期間を含む 4 月 8 日（日）までの連続 11 日間と、②4 月 14 日から同 30 日までの土曜・日曜・祝日 7 日間をあわせた、合計 18 日間とした。結果として高校生以下（小・中・高生合算）の無料入場者は 6836 人で、当初想定の 1 万人には届かなかったが、2010 年に国立新美術館で開催したセザンヌを含むポスト印象派の画家たちの作品による「オルセー美術館展」では、高校生の入場者総数のうち無料日の来館者の割合が 18.5%であったのに対して、今回のセザンヌ展では同 39.8%となり、国民的利益の具体的な還元の一つとできた。

(2) 展示作品の質・量の充実

各国のいずれの美術館の所蔵品のなかでもセザンヌの作品は近代美術セクションにおける重要な要素であり、出品の依頼は容易な作業ではなかったが、最新の政府補償制度が適用される質の高い展覧会であることを積極的に説明したことで所蔵館の理解を得、稀少な「自画像」や最高傑作の一つとされる「りんごとオレンジ」（共にオルセー美術館）や、初期の画業の再構成に不可欠であった「四季図」（パリ市立プティ・パレ美術館）など重要作品の借用が実現した。

(3) 教育・普及活動の充実

以下・別記のない限り、実施会場は国立新美術館3階講堂

◆講演会の開催

①日時：3月29日（木）14:00～15:30

演題：「パリにおけるセザンヌの画商とコレクター」

講師：マリリーヌ・アサンテ・ディ・パンツィッコ氏（パリ市立ブテ・パレ美術館学芸課長）

聴講者数：202名

②日時：3月30日（金）17:30～19:00

演題：「セザンヌとふたつの土地」

講師：ドニ・クターニュ氏（フランス国家文化財主任研究員）

聴講者数：169名

※U-Streamで放映（ライブ配信時視聴数：4,820／録画視聴数：2,357）

③日時：4月1日（日）14:00～15:30

演題：「人間セザンヌ」

講師：フィリップ・セザンヌ氏（ポール・セザンヌ協会名誉会長、ポール・セザンヌ曾孫）

聴講者数：257名

※U-Streamで放映（ライブ配信時視聴数：330／録画視聴数：1,300）

④日時：4月2日（月）19:00～20:30

演題：「セザンヌのアトリエ」

講師：ミシェル・フレッセ氏（アトリエ・レ・ローヴ館長）

会場：SPACE NIO（日本経済新聞社・東京本社2階）

聴講者数：81名

⑤日時：4月21日（土）14:00～15:30

演題：「セザンヌは山をどこから描くか」

講師：山口晃氏（画家）

聴講者数：249名

◆シンポジウムの開催

日時：5月26日（土）13:00～17:00

テーマ：「セザンヌーパリとプロヴァンス」展から見る今日のセザンヌ

講師と演題：

- ・ 永井隆則氏（京都工芸繊維大学准教授）「セザンヌ研究の現在」
- ・ 工藤弘二氏（国立新美術館研究員）「南北の対比からみるセザンヌ」
- ・ 三浦篤氏（東京大学教授）「セザンヌのパリ」
- ・ 新畑泰秀氏（ブリヂストン美術館学芸課長）「セザンヌのプロヴァンス」

（その後、全体討議）

聴講者数：188名

◆解説会の開催

日時：①4月14日（土）14:00～ ②5月13日（日）14:00～

講師：工藤弘二氏（国立新美術館研究員）

聴講者数：①203名 ②251名

◆その他

動画コンテンツ「Google Earth でめぐるセザンヌゆかりの地」を作成し、展覧会のホームページと展覧会場内の映像コーナーで閲覧できるものにした。パリと南仏の距離感や、繰り返し描かれたサント＝ヴィクトワール山とエクス市内のアトリエの位置関係などが、わかりやすいとの好評を得た。

一部の講演会では、機材と専門スタッフを導入してUストリームでの放映を行った。会場での定員数を超えて、ライブでの同時中継時およびアーカイブ上に置いたコンテンツを通じて多数の視聴者を得ることができた。

3. 事故の有無・安全管理に関する事項等（軽微な事故、ヒヤリハット事例も含む）

ヒヤリハット事例や軽微なものも含め、事故等はまったくなかった。

無理のない、余裕をもった輸送計画を立て、各所蔵先および輸送会社と十分に情報共有を経たうえで、安全第一を旨として展示・撤収作業を行った。開館時間中は1時間ごとに展示室内の滞留人数をカウントし、混雑や集中が生じた場合は運営スタッフの誘導により遅滞なくその軽減をはかった。

4. 紹介事例・今後の改善点等

国際的にも作品借用の難易度が高いセザンヌの作品を、政府補償制度の枠組みによって一堂に集結させることができ、貴重な鑑賞機会を創出できたと考えている。国内の所蔵各館からも本制度の枠組みに賛同をいただいたことで、国内に収蔵・蓄積されてきたセザンヌ作品の厚みを国民が眼前で実感できる場ともなったと思う。

本制度の適用については、展覧会ホームページのトップページならびに展覧会場入口のメイン看板上にその旨を記載した。高校生無料日の設定についてはポスターやチラシに記載して周知に努めた。

一方で出品依頼の過程で本制度への理解を得られなかった海外の美術館もあった。設立間もない制度の適用に慎重になることは貸し手としては無理からぬところもあるが、万全の運営体制のもと、無事故の実績を積み上げながら、質の高い展覧会を続けてゆくことで本制度のさらなる浸透がはかられることを期待したい。

5. 展覧会の収支決算書

主催者名 国立新美術館、日本経済新聞社

(収入)		(支出)		単位：万円
展覧会収入・その他収入	43,256	企画準備等基本経費 注)	28,326	
共催者負担	2,300	設営・運営等会場関係経費	17,230	
収入総額	45,556	支出総額	45,556	

注) 美術品保険料は補償制度の導入等により、当初想定額よりも約1,883万円、軽減された。